

## 報 告



## 創立30周年記念国際会議報告

## InfoJapan '90

## 1. 30周年国際会議の成果と意義

組織委員長 山本卓眞

情報処理学会は、1960年の創立とともに IFIP に我が国を代表して加盟、ISO および IEC への参画、米国 ACM, IEEE-CS との提携など積極的な国際交流と協力を進めてきた。学術的国際会議については、3回にわたる日米コンピュータ会議の共催、創立20周年にあたっての第8回世界コンピュータ会議の共催など日本の情報処理技術の発展に大いに貢献し、この間、会員規模も3万人に達するまでになった。

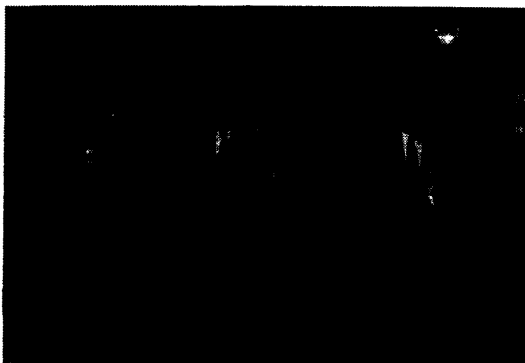
このような背景をもとに、創立30周年を機会に21世紀を展望した学術的国際会議を自主的に開催しようという機運が生じたのは、ごく自然な成り行きといえる。

1987年の理事会で学会の創立30周年記念事業の一環として「情報処理学会創立30周年記念国際会議」を開催することが正式に議決された。会議の運営に関しては、組織委員会（山本卓眞委員長）の下に、プログラム委員会（石田晴久委員長）、運営委員会（島崎恭一委員長）が組織され、綿密な計画の立案と準備を進めてきた。

会議の主題は、「Information Technology Harmonizing with Society」とし、情報処理技術の日常生活への浸透がより一層進む21世紀を展望し、人間との調和、社会との調和を目指した情報処理の学術・技術の発展をねらいとしたもので、会議の略称を InfoJapan '90 とした。

会議は1990年10月1日から5日まで、東京新宿の京王プラザホテルで開催され、参加国は28カ国、参加者数は1300名におよぶ盛会となった。国別では東南アジア、豪州、欧米はもとよりソ連を含む東欧、中近東、アフリカなど、広く世界各国からの参加があった。

会議の内容としては採択論文数119編（応募論



開会式会場へ

文数273編）が各セッションに分かれてすべて英語により発表され、活発な質疑が交わされた。また、スペシャル・イベントとしては、猪瀬博東京大学名誉教授による基調講演、嶋正利氏による特別講演、S. P. Jobs 氏による記念講演が行われ、満場を埋めつくした参加者に深い感動を与えた。今回の国際会議は、6団体の後援を受け情報処理学会が単独で開催した最初の試みであったが、規模、内容とも予期された以上の成果が収められ成功裏に閉会することができた。

## 2. プログラム委員会からの報告

プログラム委員長 石田晴久

## (1) プログラム委員会と査読

プログラム関係で協力を依頼した人の数は表-1のように多数にのぼる。委員の中では、鈴木則久氏が並列処理関係の論文集めに、また加藤肇彦氏

表-1 プログラムに関連した人々の人数

プログラム委員会委員	22人（うち海外8人）
拡大プログラム委員会委員	23人（各研究会代表）
査読者	350人（主に研究会関係者）
チュートリアル講師	8人（うち海外4人）
基調講演者	3人（猪瀬、嶋、ジョブズ）
パネリスト	15人（3件、うち海外8人）
招待講演者	37人（うち旅費支出9人）
一般講演者	76人（除キャンセル6件）
座長	70人（うち海外24人）

がチュートリアル講師としての Ichbiah 博士 (Ada 言語の設計者) の来日にとくに力をつくしてくれた。また論文の査読については研究会関係で約 350 人の人々にご協力いただいた。海外委員の中で実際に参加してくれたのは C. Wang 氏 (中国) と CMU の H. T. Kung 氏 (兼チュートリアル講師) の 2 名のみである。

## (2) 応募論文と Proceedings

情報処理の全分野を一応カバーすることにした本会議のプログラムの構成にあたっては、全体を 4 つの並列トラックに分けることにし、各トラックのセッション構成は、次のような各研究会の代表の集まりで検討して、決定してもらった。

<u>A(ソフトウェア技術)</u>	<u>C(人工知能)</u>
ソフトウェア工学	知識工学と人工知能
ソフトウェア基礎論	記号処理
OS	コンピュータビジョン
プログラミング言語	自然言語処理
<u>B(並列処理)</u>	<u>D(高度情報システム)</u>
設計自動化	データベース
アルゴリズム	コンピュータと教育
グラフィクスと CAD	マルチメディア通信
計算機アーキテクチャ	文書処理
数値解析	情報システム
マイコンとワーク ステーション	情報学基礎

またこれらの 4 トラックのほかに後述の特別トラックを設定した。

こうしてプログラムの構成、論文募集、査読、招待者決定などを話し合うためのプログラム委員会は、1988 年 5 月から 90 年 6 月にかけて、計 16 回開いた。このうち 89 年 5 月の 8 回目から 90 年 2 月の 15 回目までの各回は拡大委員会とし、前記研究会の代表の方々にも参加してもらった。あと査読の方も研究会中心にやっていただいたから、研究会の果たしてくれた役割は大きい。

さて論文募集に対しては、1990 年 2 月の締切日までに、表-2 に示すとおり、世界の 35 カ国より 273 件の応募があった。これらを 350 人の人々に査読してもらい、22 カ国からの 122 件 (うちキャンセル 3 件) を採択したが、実際にはそのうちの 37 件が招待 (依頼) 論文だったから、それを除くと、採用率は 85/236 で 36%、つまり 3 編に 1 編とかなり厳しかったことになる。

表-2 国別の論文応募状況 (35 カ国)  
数字は合格論文数/応募総数  
(招待論文数; -は当日取消し)

日 本	68/112 (25 )
ア メ リ カ	23/ 40 (11 )
中 国	4/ 16 ( -2)
韓 国*	1/ 12
イ ン ド	1/ 10 ( -1)
ソ 連	0/ 10
ホ ン コ ン	1/ 8
ド イ ツ	3/ 6
イ タ リ ア	3/ 5
シ ン ガ ポ ー ル	2/ 5
カ ナ ダ	1/ 4
オ ラ ン ダ	0/ 4
イ ス ラ エ ル	2/ 3 ( -1)
オ ー ス ト ラ リ ア	1/ 3
デ ン マ ー ク	1/ 3 ( 1 )
チ ュ ニ ジ ア *	0/ 3
イ ギ リ ス	2/ 2 ( -2)
ブルガリア*	0/ 1
そ の 他	6/ 26
合 計	119/273 (37; -6)

\* 合格後にキャンセル各 1 件、計 3 件+当日取消し 6 件。

表-3 分野 (トラック) 別の論文数

トラック	分 野	採択/応募 (招待)	日 本
A	ソフトウェア	22/ 64 (5)	11/ 25 (2)
B	並列処理	22/ 39 (9) (-1)	9/ 13 (6)
C	人工知能	28/ 65 (1) (-4)	18/ 31
D	システム	24/ 82 (2) (-1)	10/ 23
S	特別テーマ	23/ 23 (20)	20/ 20 (17)
合 計		119/273 (37) (-6)	68/112 (25)
(-6 は当日キャンセル)			

分野別の論文数は表-3 に示すとおりである。招待論文が比較的多かったのは、重要なのに日本での研究開発があまり活発でない (実際日本からの応募論文は 7 件しかなく、合格したのは 3 件) 並列処理関係で依頼を多くしたのがまず第一因である。第二因は、日本で重点的に研究開発が行われている分野として、第五世代コンピュータ、ニューロコンピュータ、スーパーコンピュータ、ソフトウェア開発環境、マイクロプロセッサ、OSI、標準化、機械翻訳の 8 テーマを選んでトラック S とし、そこでの発表はほとんどすべて招待論文としたことである。この処置は論文の質を高めるのに役立ったと思われる。

全般的にみると、応募は予想よりも多く、また非常に国際的であった。残念だったのは、日本の大学からの投稿 (や参加) がきわめて少なかったことである。また国際会議で配慮すべきこととして、参加費を前納してもらうことと、とくに途上国の人々との連絡を密にすることとで、当日の発

表キャンセルをゼロにすべく努力した。しかしそれでも、中国2件、インド1件、イスラエル1件、それになぜかイギリスから2件と、計6件の発表中止が出てしまった。イスラエルからは due to unforeseen circumstances beyond our control と書かれた断り状がきたが、これなどは断り文句としてはなかなかにくい表現といえよう（といて感心してはいけないが）。

次に猪瀬氏の基調講演論文および119件の論文および当日のプログラムなどを収録した Proceedings は次のスケジュールで事前に印刷製本し、参加者には初日に配布した。

一次原稿締切 1990年2月1日  
350人による査読 2月～4月  
最終原稿締切 1990年7月1日

この Proceedings は合計で約1000ページになったため、Part 1 (トラック A, B, S で560ページ) および Part 2 (トラック C, D とプログラムなどで431ページ) とに2分割した。これはソフトカバーで、発行元は当学会としたが、これとは別に、同じ内容で North-Holland 社にハードカバーのものを製本してもらい、Elsevier 社を通して国際的に販売してもらうことにした。これの交渉には運営委員会の大橋委員にお骨折りをいただいた。

なお、後者には、Editor: H. Ishida という形で編者として筆者の名前が入っている。これは日本との習慣の違いで、欧米では編者を明記することが必要ということであった。この編集といえば、この Proceedings では、表紙・プログラムのページ、委員や査読者のリストなど、要するに各筆者から寄せられた論文本文以外のところは、すべて筆者の研究室の鈴木寛子さんに卓上出版システム (キャノン EZPS) で入力編集してもらい、400 dps のレーザプリンタに出力したものを版下として使用した。

Proceedings にのせた情報のうち、まとめが意外に大変だったのが、査読者のリストであった。これは査読者への謝意を表するために、日本人の名前はローマ字で、所属名の英語による略記形とともにのせたが、当初このリストの作成を意識していなかったのが原因である。査読用紙には査読者の名字しか書いてもらわなかったが、これは別紙にでもフルネームと所属をローマ字および英語で

書いてもらうべきであった。

査読用紙といえば、査読結果のコメントを英語で書いてもらうことが徹底しなかったため、日本語でコメントを書いてきた査読者が何人かいた。その一部はあとで英語に直してもらって、著者 (合格した外国からの論文の) に送ったものもあるが、外国へはコメントが送れなかったケースもある。今から考えると、査読者には英語でコメントを書いてもらうよう徹底させ、そのコメントも合否判定のためのものと、採択されうるものについては改善を指示するためのコメントとを分けて書いてもらえばよかったと反省している。

(3) チュートリアル・パネル討論・基調講演  
チュートリアルには初日 (10月1日) をあて、4トラックで、日本人講師4人、外国人講師4人にそれぞれ約2.5時間の講義を依頼した。このうち外国人講師の話には日本語への同時通訳をつけた。しかし日本人講師については、当日配布の予稿やOHPシートは英語で書いてもらったものの、話は日本語でもらった。これは聴講者の大部分が日本人であったことや経費節約の点から妥当であったと思う。

チュートリアルのテーマは次のとおりである。

Ada の現状と未来 (J. Ichibiah, Alsys 社)

[聴講者=60人]

プログラムの合成——過去・現在・未来

(萩谷昌己, 京大) [60人]

並列処理: 主流へ (H. T. Kung, CMU) [90人]

マイクロコンピュータ技術の最近の進歩

(森下 巖, 東大) [80人]

知識と推論

(石塚 満, 東大) [60人]

機械学習

(J. Gennari, 慶応大) [60人]

オブジェクト指向データベース

(牧之内顕文, 九大) [80人]

データベース・プログラム言語

(P. Buneman, ペンシルバニア大) [70人]

これらのチュートリアルについては、全講師にあらかじめ英文で解説テキストを書いてもらい、当日資料集 (Tutorial texts) として配布した。

次にパネル討論会は次の3件が行われた。

並列記号処理の技術と将来

(司会: 田中英彦, 東大)

並列コンピュータの動向

(司会: 村岡洋一, 早大)

## コンピュータ・ウイルスとセキュリティ

(司会: 上条史彦, 東海大)

本来これだけ大規模な会議であれば, パネル討論はもっと多くあってもよい。そこでトラック A (ソフトウェア工学) や C (AI) 関係でも企画したいと思ったが実現しなかった。日本人が英語で話をする場合, 研究発表であれば, ほぼ一方的にしゃべればよいが, パネル討論の場合は, 対話であり, debate もしなければならぬので, 日本人主体で英語によるパネル討論をやるのはやはり困難なようである。しかし上記 3 件は, 英語の達者な日本人および外国人のパネラーで行われ, 内容もよかったため, いずれもきわめて好評だった。

3 件といえば, 基調講演も 3 件お願いした。まず猪瀬氏については, 当学会を代表する元会長クラスの人物ということでお願いすることにし, 会議の主題にふさわしい講演をしていただいた。またコンピュータ技術が一般社会に与えた最も大きな影響は明らかにマイクロコンピュータ (マイコン) であることを考え, 一時インテル社にも在籍し, 4004, 8080, Z80 などのマイコンの開発者の 1 人である嶋氏に, 世界最初のマイコンの開発の思い出も含めて, マイコン技術の発展について話をしてもらった。

さらに最終日には, NeXT 社のスティーブン・ジョブズ氏に, 話をしてもらった。当初氏の講演は 2 日目に予定したが, 氏の来日の都合で変更になったため, もともと半日の予定だった最終日はジョブズ氏の講演のみとした。ジョブズ氏に白羽の矢をあてたのは, Apple II やとくにマッキントッシュの GUI (グラフィカル・ユーザ・インタフェース) を世に出したことで, 世の中のパソコンやワークステーションの設計に最も大きなインパクトを与えたと思われるからである。プレゼンテーションのうまさでは定評のある同氏は自社製の最新型ワークステーション数台を会場に持ち込み, ビデオ・プロジェクターから巨大スクリーンに投影を行う形のデモをまじえながら, マルチメディア化された電子メールを中心とするインターパーソナル・コンピューティングについて語ってくれた。

以上の 3 氏とも人選は非常に的をえたものだったと思う。

## (4) 来日援助と電子メール

本会議ではチュートリアル講師に旅費および謝礼を支払ったのに対し, 一部の招待論文の外国人発表者は招待講演者として扱い, 旅費の援助を行った。具体的には, 各トラックの担当委員から推薦のあった人々, すなわちトラック A では B. Curtis (MCC), D. Bjørner (デンマーク), D. Ferrari (パークレー), B では D. A. Padua (イリノイ), C では金出武雄 (CMU), D では W. Kim (IBM), J. F. Sowa (IBM), S では A. Waibel (CMU), Y. Takefuji (Case Western) の各氏である。いずれの方からも招待講演の名にふさわしい内容のある講演が聞かせてもらえた。

ところで, これらの招待講演者はもとより, 一般発表者, チューター, パネリストや座長との連絡には, 今回電子メールが大いに役に立った。というのは筆者の場合, 村井純氏らの努力で拓かれた東大・慶応大・ハワイ大学の国際専用線対応ゲートウェイを介して, 日本の JUNET/WIDE ネットとアメリカのインターネットを結ぶ国際リンクが使えたからである。このため, アメリカやヨーロッパの関係者とはすぐに, また密接に連絡がとれたし, 中には第 1 次論文やアブストラクトをメールの形 (TeX および troff 形式) で送ってきた人もある。

ただメール利用に関して残念だったのは, 申込み用紙などにメール・アドレスの項目を設けなかったことである。このため, 最初はメールのやりとりができるかどうか不明で, あとになってアドレスが分かって連絡をメールに切り換えた人が何人もある。

このメールが残念ながら有効でなかったのは, 発展途上国の人たちとの連絡である。とくに, 中国, インド, モロッコの発表者たちとは FAX すら使えず, 果してきてくれるかどうか最後までハラハラした。結果的には, モロッコの Oualid 氏 (情報科学国際交流財団より渡航費援助) は来たが, 中国とインドからは欠席者が出た。しかし中国からはプログラム委員の Wang 教授を団長とする団体参加があった。これには招待状および学会からの保証書が必要であった。

保証といえば, かなり間際になって電話および FAX で保証書を送ってくれという要請がソ連の科学アカデミーからあり, これについて外務省か

らも問合わせがあった。しかし結局は手続きが間に合わなかったらしく、このソ連人（非発表者）の参加がなかったのは残念であった。途上国の人に参加してもらうには、保証書の早目の準備が不可欠である。

#### (5) 本会議の実感と反省

運営委員会の努力で、十分な寄付と参加者がえられたことで、本会議は無事開けたわけだが、細かい点では反省すべき点や認識を新たにすべき点も多い。今後の参考までに、以下に気づいたことをあげておく。

① 厳選すれば、我が会員も英語での発表やパネル討論はちゃんとできる。われわれは自信をもってよい。

② 大学の参加者を増やす努力をする。

③ 査読の英語によるコメントは合否判定用と著者への改善指示とを分ける。また事務局用に査読者の氏名と所属を英文で明記してもらう。

④ Proceedings の印刷にあたっては、英語に強い印刷所を選び、製本直前に委員会で十分なチェックを行う。今回は多少の乱丁が出てしまった。

⑤ 招待者に対しては、旅費やホテル代などについて支払う金額を明示する。単に「ビジネスクラス運賃」とか「ホテル $n$ 泊分」ではあいまいすぎる。

⑥ 途上国からの参加者にはできるだけ旅費の援助を行う。

⑦ 中国人とソ連人へは早めにビザ用証明書（保証書）を出す。

⑧ 関係者用の連絡に電子メールを活用する。申込書などには FAX 番号とともに電子メールアドレスの記入欄を設ける。

⑨ 外部に事務を委託するときには、参加者管理用の優れたソフトウェアをもち、各種の英文の手紙がちゃんと作成できて、電子メールのノードをもつところを選ぶ。

### 3. 運営委員会からの報告

運営委員長 島崎恭一

運営委員会は '88 年 9 月 28 日に第 1 回目を開催し、その後、月 1 回を原則として、'90 年 11 月 22 日の最終回まで 25 回開催した。運営委員会の委員長として留意したいいくつかの点について以下にご報告する。

なおこの運営委員会設立の約 1 年前の '87 年

10 月に、当時の浦昭二副会長が委員長となって、30 周年記念国際会議準備打合せ会が設置され、'88 年 9 月まで 14 回開催され、この会議の趣意書（案）が作成されている。運営委員会はこれを引き継いだわけであり、この国際会議の骨格は浦昭二氏を委員長とする国際会議準備打合せ会で作り上げられたということが出来る。この誌上を借りて、当時の同打合せ会のメンバーのご努力に敬意を表する次第である。

#### 〔運営委員会の役割〕

最も重要な役割は次の 4 点であると考え、これを実現させるために全力をつくした。

① 応募論文をできるかぎり多くすること。とりわけ外国からの応募を確保すること

② 会議参加者（1200 人予定）を確保すること、とりわけ外国からの参加者（200 人予定）を確保すること

③ 5 日間の会議運営を円滑確実に行うこと

④ 収支を黒字にすること

以上 4 点のうち①項はほぼ予定どおりで満足できるものであった、②項については前章にあるとおり、外国からの会議参加者が少なかったことが残念であった。この種の会議で外国からの参加者を増やすには、なんらかの特別な対策が必要と思われる、③項については、一部に問題は生じた面もあるが、おおむねうまくいったと思う、④項については完全に黒字を確保できた。

#### 〔運営委員会の構成〕

最初は 15 人でスタートした委員会であったが、途中でご協力をいただくためにさらに委員にお願いした方が 6 人おり、最終的には 21 人となった。情報処理学会との連携を保つため、その時点での国際担当理事に幹事をしていただいた。最初は、橋本昭洋氏（阪大）、矢島敬二氏（東京理科大）の 2 氏で、その後、上林彌彦氏（九大）、山本晃司氏（日立）と順次引き継いで担当していただいた。なお理事を退任された、橋本氏、矢島氏については、国際会議に対する該博な知識と情熱をおもちであり、特にお願いして最後まで副委員長として私を補佐していただいた。

委員会は、総務、経理、渉外・広報・印刷、設営・登録・見学の 4 つの WG にわけ、各委員にそのいずれかの WG を担務していただいた。総務 WG の小委員長は渋谷多喜夫氏（富士通）、経

理 WG の小委員長は酒井佐芳氏（富士通）、渉外・広報・印刷 WG の小委員長は大橋有弘氏（総務庁）、設営・登録・見学 WG は長沢東四郎氏（NTT）の各氏にお願いした。各小委員長とも、献身的に努力をしていただき、十分過ぎるほどに担務を全うされた。また菊田道夫氏（NTT データ通信）にはプログラム委員会との調整を担当していただき、両委員会に出席していただくなど 2 倍の負担をこなしていただいた。きわめて一部であるが出席率の非常に低い方がおられたのは残念であった。本来ならほかの人に代わっていただくなり辞めていただくなり

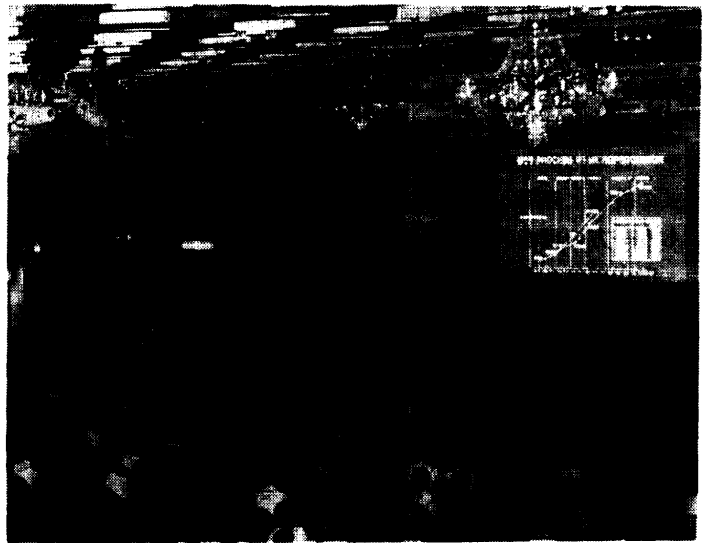
すべきであったが、私に勇気がなくそれができなかったのは申しわけないことであった。そもそも、この種の学会の委員は奉仕者であり、少なくとも情報処理でメシを喰ってその思恵を受けている以上、依頼されれば一度は引き受けるべきであろう。そして引き受けた以上は万難を排して参加協力すべきである。

いずれにしても、幹事、小委員長そしてほとんどの委員諸氏の奉仕によって、運営委員会はその職責を十分に果たしたと思う。

なお、運営委員会、プログラム委員会ともに出席者にはわずかな旅費が支給されるが、万一国際会議が赤字になった場合には、その補充の一部とすべく、支給は最後まで凍結した。幸いにも収支が黒字であったので、最後に委員の皆さんに支払うことができた。

#### 〔会議の開催日〕

会議の開催日は当初 10 月 22 日から 26 日を予定していた。しかし最終的には会場である京王プラザホテルの都合などから、10 月 1 日から 5 日までとした。10 月は情報月間であり、外国から来る人のためにもよい季節であり、この種の会議には最適の月である。さらに同じ時期にビジネスショウが開催されればと考え、主催の日本電子工業振興協会にもお願いしたが、会場の都合などでずれてしまったのは残念であった。しかし、エレクトロニクス・ショウが同一時期に開催されたのは幸運であった。特に外国から来られる人には喜んで



特別講演

らえたようである。なお同一時期に電子情報通信学会の全国大会が開催されることは気がつかなかった。この種の国際会議の日程が決まったら、関連学会にすぐ連絡して、同一時期に会議が重ならないように依頼すべきであった。

#### 〔会議公用語〕

会議に用いる言葉は全て英語とした。これについては前章にもあるが、日本の若い研究者は英語をよく話すことができ、高校の ESS のような面もあったが、おおむね順調であった。ただチュートリアルだけは英語→日本語の通訳をつけることとしたが日本人の講師の場合にどうするかで迷った。参加者のほとんどは日本人であるから、日本人の講師が英語で話し、これを通訳が日本語に直して日本人が聴くというのはどうしてもマンガである。結局、日本人の講師には OHP や予稿は全て英語で書いていただきスピーチは日本語によることとした。若干の外国人でこれが不満な方には、参加費を減額することにより対処することとしたが、それでも実際に外国人からクレームがあり、この種の取り扱いの難しさを感じた。

#### 〔支援体制〕

桜間局長をはじめとする事務局の皆さんには多大なご支援をいただいた。期間中は多くの職員をやりくりして会場に派遣していただくなど大変お骨折りいただいた。

30 周年専担としては、坂元真澄事務長、田中敏光部長補佐、萩原恵子氏の皆さんに大変お世話に

なった。坂元事務長は外国からの論文応募、会議参加の面で多大のご努力をいただいた。'89年8月にサンフランシスコで開催された IFIP には、片目の達磨まで持って行って PR していただいた。日本に戻ったこの達磨は会議の最終日の閉会式の最後に登場し、会議の成功を祝して、私からもう一方の目を入れさせていただいた。

田中補佐も献身的に働いていただいた。初めての経験でご苦労も多かったと思うが、われわれの無理な要求にも苦情を言わず対応していただいた。期日が近づくとつれ、朝早くから夜遅くまで、また休日にも出勤して処理していただくなど、その誠意ある精勤ぶりには頭が下がる。

国際会議に関する支援作業はサイマル・インターナショナル国際会議部に委託した。担当者が入れかわったりしてやや不安を感じる面もあったが、総体的にはよくやっていただいた。特に突発的なトラブルなどに臨機応変に対応していただいて助かったケースも少なくなかった。ただ、これはサイマルだけの問題ではなく日本全体として国際会議に対応する能力がもっとハイレベルの団体が数多く存在することが必要であろう。

IFIP 日本代表の尾関雅則氏（(財)鉄道総合技術研究所）には大変お世話になった。IFIP のサンフランシスコ大会をはじめ、あらゆる機会を通じて内外の識者へこの会議の紹介をしていただくなど、お忙しい中を時間をさいてご支援いただいた。個人的にも何回もご指導、激励をいただいた。誌上をかりて心から厚くお礼を申しあげる次第である。

さて、運営委員会のメンバーの皆さんからも、この会議の感想をいただいた。以下にいくつかのテーマについて、その一部を使わせていただいて私の報告に代えることとした。

#### 〔参加者〕

○ 国際会議の準備が始まったころにはすでに、情報処理分野での総花的な国際会議の失敗あるいは中止がいくつか伝えられていた。われわれの国際会議の1年前にサンフランシスコで IFIP Congress '89 が開催されたが、これが失敗するともう2度と Congress は開けなくなるということで、組織委員長が必死の努力をされていたことが思い出される。

上記の趣旨からいって、今回の国際会議は総花的にならざるをえず、IFIP、IEEE-CS、ACM の協賛は得るというものの、情報処理学会の単独主催、しかも単発の国際会議に良い論文が集まるか、外国からの参加者が集まるか、という心配があった。

この点については、約20の研究会を4グループにわけた4つのトラックと、日本の特徴的なプロジェクトを集めた一つのトラックを構成することにより、専門分野別の国際会議の集合と

して全体の国際会議を構成する方法をとることになった。この方法は、採点が少し甘いかもしれないが、ある程度の成功を取めたと思う。今後のこの種の会議の一つの方向を示したのではない。ただ、今回はトップダウンであったため、各トラックの活動が今一つだったと感じている。ボトムアップで進められればもっと活気が出ただろうと思われる。

外国からの参加者については、数こそやや少なかったものの、27カ国からの参加があったことは立派であった。

（橋本副委員長）

○ InfoJapan '90 は当初、環太平洋国際会議という位置づけであったが、最終的にはその色彩は出すまでに至らなかった。特に、アジア諸国からの参加を得る努力が不十分なままに終わった感がある。もともと、これら諸国からの参加は経費的な面から困難であることが予想されていたことからすれば、もう少し組織的な努力が必要であったと思われる。

（大橋小委員長）

○ 申込受付開始当初の出足が必ずしも芳しくないことから、参加者数の早期把握と掘り起こしに委員会側として大いに努力したことにより、当初の期待値を満足する参加者数となり、会議運営および収支の面からも会期以前に良い数字をつかむことができた。ほかの国際会議で会期に入って始めて参加者数が明確になり、期待値よりかなり少なく、収支面からも大赤字などの例もあり他山の石とすることができた。

しかし、外国からの参加者は当初の200人程度の期待値の約5割ぐらいであったことは残念である。外国での関連国際会議におけるピラ配り、外国の学会誌への広報などを事務局などで行ったが、なかなか多くを集めることの難しさを味わった。

なお、国内の大学からの参加者が非常に少なかったことはきわめて残念であった。参加登録費がホテル利用などにより高くなるざるをえなかったことが主因であると考えられる。（全参加者のほぼ1割という数字は、本国際会議のみでなく、予算事情などから常識的数字ではあるらしいが。）

国際会議参加者が国内ではほとんど企業からの参加者であるということは異常であり、今後国際会議開催の主旨に遡って議論されるべき課題であると思う。

（長沢小委員長）

○ 私のような企業の管理者とは違って、大学の先生の場合は、会議の参加費からして自己負担の形になってしまうが、これでは participate しようにも、意気が上がらないことはなほ欲しいといえよう。会議における座長の役目まで含めて、participation の内容をきちんと決めた上で、大学の先生に対しては参加費、交通費などを学会側が全て負担するという方式が望ましいと考える。

（米田英一委員（東芝））

○ 毎年秋に開催されるデータショーに参加する外国人が増加の傾向を辿っているため、次回の InfoJapan の時期をそれに合わせれば、ついでに国際会議にも出席する人が何人かあろう。また、両方のためなら日本に出張を許される外国企業の方がおられると思う。

また、翌年の予算編成時までに出席しそうな人の手元に Advanced Program が届くようにすると、企業内での許可が得やすい。このほかに、情報処理学会の会員で海外に友人・知人で日本に来れそうな人があれば個人的に呼びかけて貰い、成功した場合には記念品を差し上げるといったのも一案である。

（竹下 亨委員（日本 IBM））

#### 〔招待講演〕

○ 記念講演として猪瀬先生からこのテーマにふさわしい素晴らしい内容のご講演をいただき、深い感銘を与えたが、これを直接の題名とする論文の募集やパネル討論があってもよかったと後から感じている。真の情報社会は人間の知性や感性を高め、人間としての精神的生活を豊かにすることが要求されてきているので、このことに関心のある方々の参加が増えたかも知れない。

（竹下委員）

○ スティーブ・ジョブズ氏の講演は先方の都合で最終日ももってくる羽目になったが結果的には真打という形になり、まさに「怪我の功名」で成功であった。それにパソコンと AV

機器を駆使したあのプレゼンテーションの後では、OHP主体の発表では貧弱に感じられたであろうから、ジョブズ氏の講演を最後にもってきたのは、その意味でも正解であった。

(米田委員)

○ 今後の改善課題としてプレゼンテーション技術があげられる。米田ではworkshopはともかくconferenceではスライドが中心であり、OHPはほとんど用いられない。数百人以上の大規模のものはOHPを禁止している所が多い。今回のような1000人を超える大会議では当然スライドでやるべきであったろう。猪瀬先生のkeynote speechは内容が素晴らしいだけにやまれる。逆にSteven Jobsにはプレゼンテーション技術の極致をみせつけられた感じである。情報処理学会であるからには最先端の技術を取扱して当然であろう。マルチメディアとともに衛星中継によるパネル討論などがあってもよかったであろう。(山田昭彦委員(日本電気))

### 〔ツアー計画〕

○ Technical Visitsとして4コースを設定したが、選定にあたっては参加者(特に外国からの参加者)の興味意向がどの辺にあらうかと大いに不安であり、確信はもてなかった。

会議の主旨に近いものとして、NEC/NTTコースを作成した。これは若干月並みであったかも知れない。

個性を出すべきとして会期前後の社会・技術状況などから東京証券取引所および、ニューメディア(特にHDTV)向けのSONY/NHKコースおよび、JR新幹線コントロールセンターコースを設定した。

上記企業には大変お世話になり、お蔭で参加者からも好評であった。感想として企業見学の場、確実な責任者とコンタクトをとることが大切である。一度別な方と接触をもち、話を進め、順調でないとして対象者を変えていただくことは非常にまずい。したがって初めの段階の是非がほとんどその後を決定してしまうと思う。さらに定期的な連絡を取り、会議準備側の状況、情報を連絡しておくことも大切である。(長沢小委員長)

### 〔予算および運営〕

○ 準備会段階で、それまでの類似の国際会議の実績から、ホテルを会場に使うと1人当たり約10万円かかると試算していた。参加者が負担できるのはせいぜい5万円が限度(大学にきて5万円でも非常に苦しいことがよく分かった)であるから、半額を特別賛助会費に頼らざるをえない。

この点については、会場はホテルではなく大学を利用し、事務処理も営利企業ではなく学会事務センターを使って経費を節減してはどうか、という意見があった。大学を利用すると夏休み期間とならざるをえず、蒸し暑い夏に空調のない教室で会議をしても会議にならない恐れがあり、夏休み期間中の成田空港のバンク状態も心配であった。事務処理についても、1000名を超える参加者を予定しており、実績のある業者が必要と考えた。このようなことから賛助会費からの多額の援助をお願いし、聞き入れていただいたのは有り難いことであった。

結果的には、今年の夏は記録的な暑さとなり、大学を使っていたら大変だったろうと思われる。経費のほうは、運営委員会諸兄のご努力により、1人当たり7~8万円に抑えることができた。今回は30周年記念事業の一環ということで、財務委員会が別に設けられ組織委員会としては募金の苦労はなかったが、一般の国際会議では、募金活動に大半の精力を使うと聞いている。ホテル代の占める割合が高く、安く使える国際会議場が望まれる。(橋本副委員長)

○ 会期、会場、参加人員規模および他国際会議などの常識から、ある程度予算が明確化してくるが、運営委員会として参加者数の不確実度合などから、相当な危機意識をもち、具体的執行にあたっては毎月の点検を行うとともに、内容的に常に厳しい方向で対処したこと。さらに印刷物、カパンなどの発注にあたって関連委員の発注先選定など相当な努力により節減に努めたことは成功であった。そのため会期2~3カ月前には最終的な収支をかなり明確に把握でき、若干心の余裕をもってその

後の準備を進められたと思う。

(長沢小委員長)

○ 大変豪華な会場(京王プラザホテル)で開催され、また、レセプション、バンケット共にきわめて豪華な雰囲気の中で催され、権威ある学会の記念行事としてふさわしいものであった。

他面、それを経済的側面から支えた各社からの寄付と多額の参加費用との兼ね合いをも考慮しなければならず、今後の企画にあたり、華美になり過ぎない運営を留意する必要があると考える。(酒井小委員長)

○ ちかごろ、日本の企業は昔の「貴族」だと思ふことがある。世の中のあらゆる富が法人に蓄積され、あたかも昔の貴族のようである。貴族が芸術を庇護したように、法人貴族が社会的にいろいろともって貢献するように努力すべきだと思う。しかし、企業サイドの関係者としての本音もいわせてもらえば、日本での国際会議がもっと安く、寄付なしで、参加者の動員もかけないで実施できるインフラが整えられるといいなあと思う。そのための条件整備は並み大抵ではないと思うが、やはりみんなで少しでも努力したいと思う。

(山田郁夫委員(三菱電機))

○ セッションによっては事前の予定と異なり、特定なセッションで準備した座席の1.5倍ぐらゐの入場者があり大いにあわてたが、このような場合のホテル利用の利便さか、5~10分ぐらゐで必要な椅子を手際よく準備でき盛況裡に進行できた。このようなことは大学を会場とした場合は不可能であろうし、長い期間中には必ず起こることと思う。(長沢小委員長)

### 〔国際会議のあり方〕

○ 学会の研究会を主体とする日米主軸型の国際会議として十分な機能をはたしたものと考える。会議の途中で今後の国際会議のためにアンケート用紙を用意すればよかったなどと考えたが、疲労感が先行して実行しなかった。日米主軸型では問題にならないが、日本の新しい役割を意識する場合には、国際的な意見をふまえて会合の哲学をうちたてる必要があると感じている。(矢島副委員長)

○ 今後、論文募集、発表という形式の国際会議ばかりでなく、ワークショップ、セミナーなどを開催するとともに、それらを通じて各国(特に開発途上国)の研究者、実務者との交流を深め、共同研究、共同プロジェクトが実施されるようなことが望まれる。日本の情報技術の研究を代表する情報処理学会にはそれが期待されているし、それだけの責任もあるのではないか。その際、高度な研究のみを対象とするのではなく、実践的な諸課題の検討、経験の交流などもあってよいのではないか。(橋本小委員長)

○ '90年代はあらゆる分野で世界に対する日本の貢献が求められている。とくに情報処理分野については日本から世界各国への技術移転が求められている。今回のわれわれのInfoJapan'90は「日本からの情報発信と世界への貢献」能力を十分もちあわせていることを実証したと思う。とくに若い研究者・技術者の英語力は予想以上に高く、頼もしいかぎりであった。このような国際会議が日本で数多く開催されれば、日本人の世界への情報発信能力と貢献はますます高まり、世界からの期待に応えられるであろう。(山田郁夫委員)



レセプション会場で Wood 女史と三浦会長



○ 国際会議は海外の研究者、学会との関係を強めるのに絶好の機会である。IEEE-CS と IPSJ は 1987 年に affiliate agreement を結び、sister society となって以来その関係を強めてきたが、1989 年 8 月に坂元事務長とともにワシントンの CS 事務局本部に専務理事 Dr. Elliott 氏を訪ね、InfoJapan の協力をお願いした。これにより両学会の事務局レベルでの関係も一層強まったことと思う。InfoJapan '90 当日は President Helen Wood 女史、専務理事 Dr. Elliott 氏の参加があり、パンケットで Wood 女史より祝辞と情報処理学会会長への記念品贈呈があったが、両学会の関係を形の上でも残すことができ、有意義であったと思う。Wood 女史には最初 Banquet Speech ということでお願いしたため原稿を用意してこられ、祝辞に変更していただくようお願いしたつもりだったが、用意されたものはすべて話されたため長くなり、若干不詳をかったようだ。ただ、あとで原稿をみせてもらったところ、これまでの両学会の関係を凝縮した形でまとめであり、これ以上短くしようがなかったということかもしれない。(山田昭彦委員)

○ 情報処理学会の 40 周年記念は西暦 2000 年と一致し、Info Japan 2000 の準備も数年後には開始されるであろう。今から 10 年間に情報技術は飛躍的に進歩し、内容は非常に変わってくるので、会議の準備・設営・運営などには今回の経験・教訓を

生かし、さらに大成功を収めることを今から祈っている。

(竹下委員)

以上のとおり、今後の国際会議のさらなる飛躍を期待しつつ、InfoJapan '90 をなんとか終了することができた。なお、この国際会議の概要を付属資料として、この報告の最後につけさせていた

情報処理学会理事会(三浦武雄会長(日立))、創立 30 周年記念事業実行委員会(大野 豊委員長(立命館大学))、創立 30 周年記念国際会議組織委員会(山本卓真委員長(富士通))の皆さまからいただいたご指導、ご支援に感謝するとともに、会議に参加し、あるいはご協力いただいた国の内外の皆さまに心からお礼申しあげる次第である。

## 付属資料 創立 30 周年国際会議の概要

### 1. 会議の名称

英文名: International Conference on Information Technology Commemorating the 30th Anniversary of The Information Processing Society of Japan

和名: 情報処理学会創立 30 周年記念国際会議

略称: InfoJapan '90

### 2. 主催

社団法人 情報処理学会

### 3. 後援

文部省、総務庁、科学技術庁、外務省、通商産業省、郵政省

### 4. 協賛

応用統計学会、(社)計測自動制御学会、(社)照明学会、(社)人工知能学会、(社)精密工学会、(社)テレビジョン工学会、(社)電気学会、(社)電子情報通信学会、(社)日本オペレーション・リサーチ学会、日本行動計量学会、日本ソフトウェア科学会、日本人間工学会、(社)日本品質管理学会、日本ロボット学会、認知科学会

The International Federation for Information Processing (IFIP), The Association for Computing Machinery (ACM), IEEE Computer Society (IEEE CS), Information processing Society of China (IPSC), Computer Society of India (CIS), Korea Information Science Society (KISS), Singapore Computer Society (SCS), The New Zealand Computer Society (NZCS), South East Asia Regional Computer Confederation (SEARCC)

### 5. 委員会の構成

各委員会の構成は次のとおり。なお全体の構成図を図-1 に示す。

#### (1) 組織委員会

委員長: 山本卓真

副委員長: 浦 昭二

委員: 相模秀夫以下 98 名(大学、企業の有識者)

幹事: 上林彌彦, 山本晃司(情報処理学会理事)

#### (2) プログラム委員会

委員長: 石田晴久

委員: 安西祐一郎, 植村俊亮, 牛島和夫, 片山卓也, 鈴木則久, 田中英彦, 堂免信義, 長尾 真, 西関隆夫, 廣瀬 健, 松下 温, 村上国男, 菊田道夫(運営委員会連絡員)

幹事: 佐藤 繁

海外委員: R. P. Brent (Australia), C. S. Kim (Korea), H. T. Kung (USA), C. V. Ramamoorthy (USA), N. Seshagiri (India), W. Wahlster (Germany), C. Wang (China), C. K. Yuen (Singapore)

#### A セッション・トラック分科会

主査: 廣瀬 健

幹事: 永田守男

委員: 片山卓也, 佐藤彌彦, 柴山悦哉, 堂免信義, 松田晃一, 安村通晃, 吉澤康文

#### B セッション・トラック分科会

主査: 鈴木則久

幹事: 小澤時典

委員: 浅野哲夫, 川合 慧, 田中英彦, 戸川隼人, 西関隆夫, 森本陽一郎, 横田 実

#### C セッション・トラック分科会

主査: 村上国男

幹事: 原口 誠

委員: 安西祐一郎, 小谷善行, 鳥脇純一郎, 長尾 真, 野村浩郷

#### D セッション・トラック分科会

主査: 植村俊亮

幹事: 清水 康

委員: 有山正孝, 牛島和夫, 浦野義頼, 大山 祐, 槻木公一, 藤原 謙, 松下 温

#### (3) 運営委員会

委員長: 島崎恭一

副委員長: 橋本昭洋, 矢島敬二

幹事: 上林彌彦, 山本晃司

委員: 井出昭八郎, 大橋有弘, 寛 捷彦, 菊田道夫, 酒井佐芳, 渋谷多喜夫, 竹下 亨, 土居範久, 名内泰蔵, 長澤東四郎, 西本孝一, 似鳥一彦, 広野和夫, 山田昭彦, 山田郁夫, 米田英一

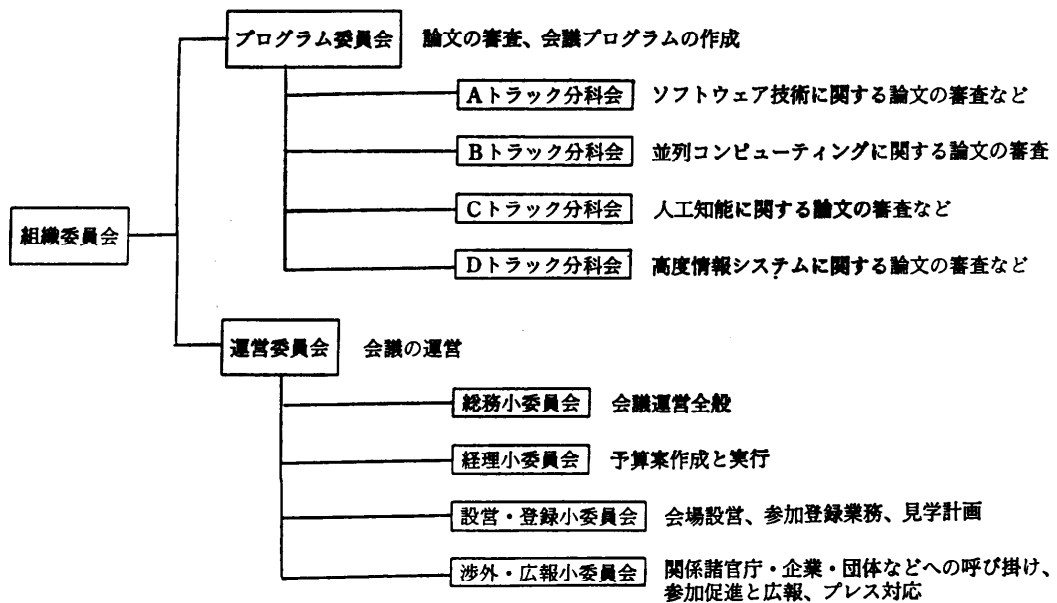


図-1 創立 30 周年国際会議委員会の組織構成

表-1 国際会議日程

月 日	午 前	午 後	夜
10月1日(月)	チュートリアル (4会場) 9:30 17:00		
10月2日(火)	開会式 10:30	基調講演 11:00 12:00	セッション (5会場) 13:30 17:30 レセプション 17:30~19:30
10月3日(水)	セッション (5会場) 9:00 12:30		セッション (5会場) 14:00 17:30
10月4日(木)	セッション (5会場) 9:00 12:30		特別講演 14:00 15:00 セッション (5会場) 15:30 17:00 バンケット 18:00~20:30
10月5日(金)	記念講演 10:00 11:30		

注) 5会場ではそれぞれA:ソフトウェア技術, B:並列コンピューティング, C:人工知能, D:高度情報システム, S:特別セッションを行う。

6. 会場と日程

会場: 京王プラザホテル (新宿)

日程: 平成 2 年 (1990) 10 月 1 日 (月)~5 日 (金) (表-1 に示す)

7. 参加費

会議, チュートリアル, バンケット参加登録費

申込み時期		'90年 8月31日以前	'90年 9月1日以降
参加区別	一般	50,000 円	60,000 円
	学生	25,000 円	30,000 円
同 伴 者		8,000 円	9,000 円
チュートリアル		30,000 円	
バンケット		10,000 円	12,000 円

8. 参加者数

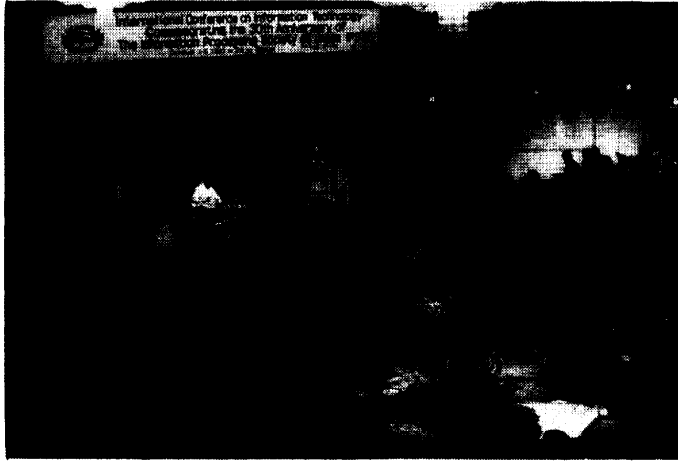
表-2 に国別参加者数を示す。参加者 1,300 名のうち 1,192 名が日本人で外国人がわずか 108 名であったが、大盛会であった。また、日本人の参加者は企業が約 1,097 名、大学が約 95 名であった。

9. 会議運営

① 開会式と基調講演

10月2日10時30分から約700名が出席し、山本組織委員長の開会の辞で始まった。来賓として額賀通産政務次官の挨拶があった。

式後、文部省学術情報センター所長猪瀬博氏が会議の主題でもある“社会と調和のとれた情報処理の発展”について基調講演を行った。



バンケット会場

② レセプション

10月2日17時30分から約500名が出席し歓迎のレセプションを行い、Ms. Wood (IEEE-CS 会長)、山本組織委員長、大野実行委員長、三浦情報処理学会長による日本伝統の鏡割りを行うなど、大いに宴会を盛り上げた。

③ 特別講演、記念講演

**特別講演** 日時: 10月4日 14時~15時  
 演 題: (仮想マシン) + (ASIP) = (未来に向けてのシリコン解放)  
 講演者: 嶋 正利氏 (ブイ・エム・テクノロジー社副社長)  
 参加者: 約500名

**記念講演** 日時: 10月5日 10時~11時30分  
 演 題: Computing in the 90s  
 講演者: スティーブン・ジョブズ氏 (ネクスト社社長)  
 参加者: 約800名

④ バンケット

10月4日17時30分からバンケットに先立ち、これを盛り上げるため日本の古典芸能である能(羽衣)を上演した。外国人はもちろんのこと多数の人が熱心に観劇した。バンケットでは大野実行委員長の挨拶の後、Ms. Wood から当学会30周年を記念して、CS および IPSJ 両学会の紋章を刻んだ Gavel が三浦会長に贈呈された。

⑤ テクニカルツアー

次の4コースを実施した。

コースA: 10月3日(水) 午前 NEC C&C プラザ  
 午後 NTT 霞ヶ関コミュニケーションセンター  
 参加者 23名

表-2 国別参加登録者数

日 本	1,192	イギリス	2
アメリカ	39	ホンコン	1
中 国	9	イスラエル	1
ド イ ツ	5	台 湾	1
イタリー	5	オーストリア	1
韓 国	5	ブラジル	1
フィンランド	4	デンマーク	1
ハンガリー	4	イ ン ド	1
シンガポール	4	モロッコ	1
オーストラリア	3	ナイジェリア	1
ベルギー	3	フィリピン	1
オランダ	3	スエーデン	1
ソ 連	3	ス イ ス	1
カナダ	2	国 外 計	108
フランス	2	合 計	1,300

コースB: 10月3日(水) 午前 ソニーメディアワールド  
 午後 NHK 放送センター (ハイビジョンシステム)  
 参加者 25名

コースC: 10月4日(木) 午前 東京証券取引所  
 参加者 16名

コースD: 10月4日(木) 午前 新幹線コントロールセンター  
 参加者 14名

⑥ そ の 他

出 展 IEEE-CS, エルゼビア, インターナレッジの3社が会場に書籍などを展示した。  
 宿泊・旅行 (株)阪急交通社が会場に出向した。  
 荷物発送など 新宿郵便局が会場に出向した。